

● 創立 50 周年記念特集 ●

写真で綴る 情報処理学会全国大会 50 年史

パーソナルコンピュータもインターネットもなかった頃の諸先輩方のご苦勞を、写真を通じて今に伝えたい。それが本企画のきっかけでした。とりわけ情報処理学会全国大会における諸先輩方のご苦勞の中には、研究活動に対する厳しさと楽しさがたくさんつまっていると感じているためです。

インターネットが普及した現代においては、それ以前から比べれば文献を探したり、自分の研究成果を発信したりということが容易になりました。しかし研究活動の本質が、厳しくそして楽しいものであるということは、今も昔も同じであるはずで、50 周年という区切りの企画として、今一度、研究の厳しさと楽しさを、情報処理学会全国大会の写真を通じて振り返るとするのが本企画の主旨です。

本企画の取材で、多くの先輩方に取材をさせていただきました。また多くの方から写真や、発表時に利用した模造紙もご提供いただきました。そこには、この企画には収まりきれないほどの研究に対する熱い思いが詰まっておりました。このような諸先輩方の熱意は、これから研究に取り組む皆さんにも大いに参考になるはずです。

本企画でご紹介した諸先輩方の熱意をきっかけにして、皆様のご研究がよりいっそう発展することを願っております。

田中 秀樹 (国立情報学研究所)



Satoru Kawai

● 特別インタビュー ●

大切なのは アイディア

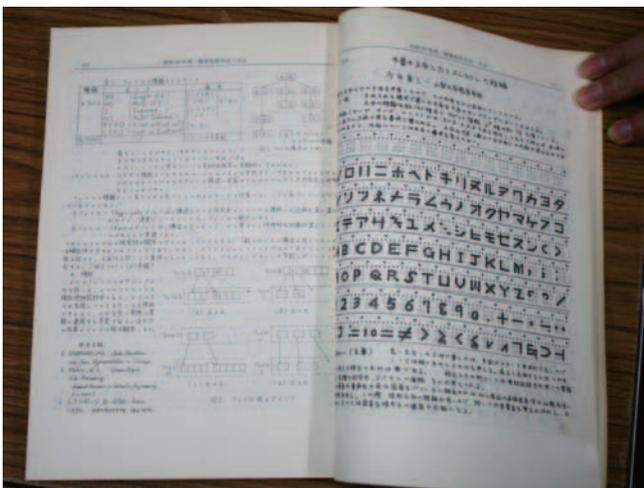
巻頭インタビューでは、情報処理学会全国大会の第10回から参加し、東京大学大学院総合文化研究科教授を経て、現在放送大学 教養学部 教授を務める川合 慧先生に、記念すべき50周年記念について、その思いをうかがった。

学生たちの交流の場という 側面もあった全国大会

-- 今年、情報処理学会全国大会が50周年を迎えることとなりました。第10回大会から参加されている川合先生にとって、情報処理学会全国大会とはどのような印象がありますか。

川合先生: 現在、情報処理学会は非常に大きくなっていて、研究会などもたくさんあります。そのような中で、発表の場としてだけではなく、最低限、年に1回みんなで集まるという主旨があるのだと思います。これは、どのような学会においてもそうだと思います。

そのほかにも、研究者の下で研究する学生さんが知り合う場という意味があります。最初の頃は特にそのような意味合いが強かったと思います。



-- その当時は、どのぐらいの方が参加していたのでしょうか。

川合先生: 参加人数は結構多かったですね。元々東京近辺出身の先生方が多く、大阪近郊の大学や東北大学の方々も多く参加していました。そして、その先生方と学生さんが一緒に来ていましたね。特に10周年記念大会の時は、盛大に開催されたことを覚えています。

もう亡くなられた後藤英一先生が「いろいろなところに出なければいかん」と仰っており、私を含めて毎回7~8人ほどの学生を連れて参加していました。

-- 当時、開催する場所は理事会で決定していたのでしょうか。

川合先生: そうですね。今でもそうですが、会場費が無料で、1セッションに50人ぐらいは入れる部屋があり、交通の便が良いところといった制約があります。その当時は大体5つか6つのセッションでしたが、今は40ぐらいの会場が必要ですね。

トラブルに強いアナログ時代

-- これまでの全国大会で、印象的な出来事はございますか。

川合先生: 私の場合、発表よりは、懇親会などで研究者が集まり、さまざまな議論をしていたことが印象に残っています。学生はそういった懇親会などにこっそり参加をして、先生に顔を覚えてもらい、つながりを増やしていましたね。

-- 学生さんにとってはチャンスでもあったのですね。先ほど、

第10回大会の予稿集を拝見したのですが、当時は手書きの論文が多かったことがわかります。現在から考えると原稿作成に大変時間がかかったように感じるのですが。

川合先生：確かに綺麗な図などを作成する場合は、多少大変なところがありました。けれども原稿そのものはそれほど分量が多いわけではありませんので、作成は今とそれほど変わらないと思います。逆に現在は編集がしやすくなりましたので、なかなか踏ん切りがつかなくて、延々と推敲を繰り返してしまいますね。

→逆に、時間がかかってしまうのですね。

川合先生：そうですね。その当時は、字数があふれて足りない時に、分量の加減をどのように行うかといったことぐらいでしたから。原稿の中身を作成する時の時間というのは、今とそれほど変わりません。

また、写真などは切り抜いて原稿に直接貼っていました。当時は、ワープロが非常に高価でしたので、メーカーに關係している研究所の方でないとワープロが使えないという状況でした。

→当時はどのように発表が行われていたのでしょうか。

川合先生：最初の頃のプレゼンは模造紙で行っていました。今のポスターセッションのようなイメージです。すべて手書きですけれども、セッションの合計時間は大体15分ありまして、3分ほど喋ったら、1枚目の模造紙を破って次の説明に移るという流れでした。私自身は模造紙で発表を行ったことはないのですが、模造紙は3枚までというような決まりもさまざまあったようです。

また模造紙と並行してOHPも利用されるようになりました。OHPは停電すると駄目でしたね。OHPで発表する場合は、OHPのスライドと同じことを話しているのだから、逆にそれがないと発表できないということもありました。

他にも、プロジェクタの色とPCの色の違いによるトラブルもありましたね。「この黄緑色の部分が」と言っても、プロジェクタで表示された色はピンクだったりすることがありました。模造紙の場合は、逆にそのようなことはありませんでしたね。

現在は、ノートPCやパワーポイントのデータを持ってきて発表するのが普通ですけれども、昔に比べてトラブルが多いように感じます。

→今よりも昔の方がトラブルには強かったのですね。

川合先生：昔の方が丈夫だったのかもしれませんが。今は精密になった分、逆にもろくなったところはあると思います。

→川合先生が、印象に残っている技術や論文などはありますか。

川合先生：印象に残っているのは、JR（その時は国鉄）のプロジェクトで、ダイヤが乱れた時に、それをどのように早く回復するかという発表です。1セッションで8～10件もあり、やはりある程度の大きな規模の発表は、面白かったですね。それからスーパーコンピュータの発表で日立と富士通のセッションを見て、両方を聞き比べたりもしました。

私が大学院生から助手の頃は、予稿集のスケジュールを見ながら、これを見たら、次にこれを見てスケジュールを立てていましたね。

中には、全国大会で2～3件の発表をするのがノルマというところもあったように思います。全国大会は査読がありませんので、学生の発表練習の場として活用していたようです。その当時、学生だった方々は今も活躍されていますし、そのような役割もあったように思います。



大切なのはアイデア

→全国大会には今後どのような試みが大切だと考えていますか。

川合先生：全国大会が春と秋の開催になり、開催地を東京と地方に分けることで、地方の研究者の方がより参加しやすくなりました。また、企業展示などの試みもありましたね。最近では、学生に向けて賞を出すなど、さまざまな取り組みが行われています。

現在、全国大会は規模が大きくなってきたかなと私は感じています。第10回大会の発表件数は180件ほどですが、

今は1,000件を超え、5倍以上の件数になっています。そのため、なかなかすべての発表に目を通すのが難しくなってきました。他の学会の中には、分野をいくつかに分けて、それぞれが全国大会を開催しています。情報処理学会も、そのような試みを行ってみるのも良いのではないかと思います。

また、大切なのはアイデアです。

—確かに、アイデアだけでできるというのは、ソフトウェアの良いところですね。

川合先生：たとえば、ソフトウェア学会の場合は、ソフトウェアを作って発表するだけのカテゴリを設けています。今後はそのようなアイデアを大切に方向に向かっていかなければならないと思っていますし、そのような活動をしていかなければならないと思います。

—たとえば、全国大会を海外で開催するというアイデアはどうでしょうか。

川合先生：現在の全国大会はとても規模が大きくなっていますので、すぐに海外で開催するのは難しいのかもしれませんが、ただし、研究会の研究発表会は、年に4、5回行われています。その中の1回をつながりのある海外の先生のところで行うのは良いかもしれません。そのような取り組みが、研究会レベルでは少しずつ始まっていると伺っています。

—学生の方に英語で論文を書いたり、英語で発表をしてもらったりするのは、いかがでしょうか。

川合先生：英語で論文を書くことは、良い考えだと私も思っています。それによって、日本だけでなく世界へもつながりますので、サーキュレーションも良くなります。けれども、最近の全国大会には、学生の発表練習を行う場であるという意味合いも加わっていますので、すべての論文や発表を英語で行うことは難しいかもしれませんね。

ただし、英語で論文を書く練習を行うのは良い面があります。最近では、日本語で文章を書くことに不慣れな学生も多いです。文章になっていない論文を見かけることがあります。英語の場合、主語、動詞、目的語を理解しておかなければ、文章を書くことができません。そのため英語で文書を書く練習をしておけば、基本的な文章力が鍛えられると思いますよ。

—それはとても興味深い取り組みですね。さらに、企業や個人の方たちの参加というのはどうでしょうか。

川合先生：もちろん、私は参加して欲しいと考えています。研究会レベルでは、デジタルドキュメントやネットワーク関連

で実際にシステムを作っている方が参加し発表しているようです。けれども情報処理学会全体としては企業や個人の参加者の数は少ないのが現状です。今後は、これまで層の薄かった学生や実際にシステムを作っている人たちの会員数が増えていけば、良い方向に進んでいくと思います。

情報技術の業界は化学や物理学と違って、私くらいの年齢ですとほぼ最初の部分からすべて知っています。これは他の分野にはない特性です。今後はそのような特性を踏まえて、研究や社会へのアピールをしていく必要があると思います。

—50周年を迎えた今、情報処理分野の特性を改めて見つめ直し、それを活かしていくことが求められているのだと思います。ありがとうございました。



川合 慧 (Kawai, Satoru)

放送大学教授。(1)昭和56-60年会誌編集委員およびSWG主査、昭和61-65年グラフィクスとCAD研究会主査、平成1-5年プログラミングシンポジウム幹事長、昭和62-平成10年情報規格調査会SC24専門委員長、情報処理教育委員会一般情報処理教育小委員会委員長、コンピュータと教育研究会主査等を歴任。(2)昭和42年東京大学理学部卒業、昭和45年同大学助手を経て、昭和63年より同大学教授。平成19年より現職。